



毎週 木曜日 よる 8:54~9:00  
金曜日 よる 8:54~9:00



## #324 シシノメラボ「命の尊さを知るレザー」

2024年3月7日（木）よる 8:54~9:00



2030年の未来のカたち“SDGs”。難しそうなSDGsの世界を、絵本を読み進めるように紹介。今回は、シシノメラボが取り組む、命の循環につながるレザーです。



# 日本経済新聞

5月23日

火曜日

発行所 日本経済新聞社  
 東京本社 電話(03)3270-0251  
 〒100-0006 東京都千代田区大手町1-3-7  
 大阪本社 電話(06)7639-7111  
 名古屋支社 電話(052)243-3311  
 西支社 電話(092)473-3300  
 札幌支社 電話(011)281-3211

情報コミュニケーション&ドキュメンテーション

高い専門性 揺るぎない信頼

## プロネクサス

証券コード 7893

PRONEXUS  
www.pronexus.co.jp

日経电子版

https://www.nikkei.com/

新聞購読のお申し込み

https://www.nikkei4946.com/

ご購入・お問い合わせ

0120-21-4946 (7:00-21:00)

https://www.nikkei.com/faq/

岸田文雄首相は22日、

少子化対策

## 財源「氷

# ジビエの皮を革製品に

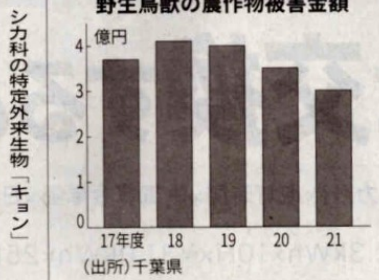
## 県内の職人が団体設立

千葉県内で農作物などを荒らす「害獣」の皮を有効活用しようと新たな団体が立ち上がった。イノシシやシカなど、食肉のジビエとしての利用は少しずつ進むが、獣皮は焼却処分されることが多い。革製品の普及で、害獣が地域にとって利益を生み出す「財獣」となることを目指す。

県内の革職人3人が新公園が後援している。団体「シシノメラボ」を設立した。目的は害獣と有効活用する。シシノメラボの辻栄亮代表は「捕獲され、ジビエ肉に加工された後、残渣(さんさ)となる獣皮を使っただけでは、革製品の普及活動だ。3人が所属する企業3社が協賛、害獣対策に賛同した企業などが協力企業として参画、千葉市動物くは有害物質や金属など皮加工のなめし剤の多



千葉県内で活動する3人の革職人が「シシノメラボ」を立ち上げた



シカ科の特定外来生物「キョン」

## 「チバレザー」でブランド化 環境負荷かけずに加工

を含む化学薬品が使われている。接着剤のほか、縫製の糸もポリエステルといった化学繊維などが使用されていることが多い。

そこで団体は地中で分解できる素材のなめし剤や接着剤、糸などを利用し、環境に負荷をかけない方法で加工した害獣の革製品について「チバレザー」と名付けてブランド化を図る。商標登録を目指し、今夏以降、出願手続きをする予定だ。

辻栄代表は「土に返すことまで考えて製品化するのには国内では類をみない取り組みだと自負している。このスキームを生かして、全国の害獣で困っている地域にノウハウを届けたい」と意気込む。

革製品に活用するの

は、主にイノシシやシカ科の特定外来生物「キョン」などの獣皮。イノシシの革は豚革のように軽くて丈夫だという。キョンの革は手触りが柔らかく、原産の台湾では高級品とされている。

団体発起人の一人、大坂谷未久さんはキョンの革製品を手がけており「革製品は硬いものが多いが、キョンの革は柔らかいので手に取りやすい」と話す。女性向けに淡い色合いに染めた革製品も製作している。

キョンはもともと観光施設から逃げ出し、房総半島で繁殖したと言われている。「千葉で防波堤としてキョンの繁殖を食い止めない」と、本州に広がる、国内の生態系を壊してしまつと大坂谷さんは危惧する。

野生動物は大きさや量が一定ではなく、一般的な牛皮などと比べて、獣皮の加工コストが高くなる。地中で分解できるなめし剤も使うため、なめし職人が限られることもコスト高の要因になる。

ただ「価格の背景を伝えることが重要だ。革はあくまで食肉の副産物で、革のために動物を殺しているという誤解も解いていかなければなら

い」と辻栄代表は話す。団体を通じて獣皮の革製品の取り組みを広め、消費者に納得して購入してもらおう狙いという。

今後は千葉市動物公園での講演会に参加して啓蒙活動を進めるほか、展示会や商談会などでも革製品を販売していく。

千葉県内の野生鳥獣による農作物の被害額は、2021年度は約3億円に上った。害獣の捕獲数が増えているため、被害が拡大するようなら取り組みを進める計画だ。

が「有害鳥獣の生息数はまだ減少傾向にはない(県の担当者)。県は狩猟免許を持つているが狩猟していない人や初心者が増えているため、被害が拡大するようなら取り組みを進める計画だ。

が「有害鳥獣の生息数はまだ減少傾向にはない(県の担当者)。県は狩猟免許を持つているが狩猟していない人や初心者が増えているため、被害が拡大するようなら取り組みを進める計画だ。

が「有害鳥獣の生息数はまだ減少傾向にはない(県の担当者)。県は狩猟免許を持つているが狩猟していない人や初心者が増えているため、被害が拡大するようなら取り組みを進める計画だ。

が「有害鳥獣の生息数はまだ減少傾向にはない(県の担当者)。県は狩猟免許を持つているが狩猟していない人や初心者が増えているため、被害が拡大するようなら取り組みを進める計画だ。

が「有害鳥獣の生息数はまだ減少傾向にはない(県の担当者)。県は狩猟免許を持つているが狩猟していない人や初心者が増えているため、被害が拡大するようなら取り組みを進める計画だ。



## 害獣からレザー製品 新団体



④県内で捕獲された獣の皮を活用した革製品を掲げる発起人の辻栄亮さん、大阪谷未久さん、佐藤剛さん(左から)  
⑤発起人の一人、大阪谷未久さんが手がけた革製品  
=いずれも16日、県庁

### シシノメラボ 県内3職人が設立

農作物を荒らして被害をもたらすイノシシやシカなどの皮を革製品に生まれ変わらせることで、循環型社会づくりを進める新団体「シシノメラボ」が産声を上げた。設立メンバーは、県内で活動する3人の革職人。「害獣」を、利益をもたらす「財獣」に変えようという逆転の発想で、地域振興につなげることを目指す。  
(村田幸子、写真も)

シシノメラボを設立したのは、いずれも県内で革職人として活動する辻栄亮さん(43)▽大阪谷未久さん(31)▽佐藤剛さん(42)。3人は、新団体の発起人としてこのほど県庁で記者会見し、発起人代表を務める辻栄さんは「害獣の皮が活用されていないという共通認識を持ち、地域の課題を地域に還元し、命の大切さを伝えたい」と強調する。大阪谷さんは、県内で分布拡大や生息数増加が進んでいるシカ科の特定外来生物「キョン」の皮の柔らかさを

「伝えたい」と同じ意思の3人が集まった」と説明した。  
辻栄さんは、獣の皮を使ったアックカパーやポーチを手がけており、「接着剤や革を磨く薬剤にもこだわっている」と強調する。大阪谷さんは、県内で分布拡大や生息数増加が進んでいるシカ科の特定外来生物「キョン」の皮の柔らかさを

# 千葉



チーバくん

千葉総局

〒260-0013  
千葉市中央区中央  
4-17-3

電話 043-225-2171  
FAX 043-226-1782  
chiba@sankei.co.jp  
広告 043-202-8600

購読申し込み・  
配達・集金

0120-34-4646

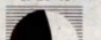
紙面・記事

0570-046460

Web

<https://www.sankei.com/region/>

(25日)  
旧4月6日  
《先負》



# 東京新聞

夕刊

中日新聞東京本社  
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号  
〒100-8505 電話 03(6910)2211

銀座本店六丁目並木通り  
並利商標高号

紙面から  
在日3世の  
元選手挑戦



在日3世で韓国プロサッカーの元選手が大衆居酒屋を開き、第二の人生を歩み始めた。

ブリゴジン氏に近い将校拘束か  
強盗容疑で「ルフィ」再逮捕

4910864952925 00046

文化 小説3

## 獣害から恵みの革を

### 「チバレザー」商標登録目指す

農作物被害対策で捕獲された野生動物の皮を革製品に再生し、命や資源の循環につなげようと、千葉県内の皮革職人三人が活動グループ「シノメラボ」を立ち上げた。使い終わった後は土に返せる「チバレザー」として、革素材の商標登録を目指す。発起人代表の辻栄亮さん(四邑)は「野生動物の命を地域の『財賦』として生かし、SDGs(持続可能な開発目標)を実現したい」と話す。(加藤豊大)



①シノメラボを立ち上げた(左から)佐藤さん、辻栄亮さん、大阪谷さん(千葉県内で「シノメラボ」提供)  
②チバレザーで作られたジャケットを手に「土に返す」として命の循環のヒースを完成させたい」と語る辻栄亮さん(東京都内で加藤豊大撮影)



なめらかな手触りの革素材が、五月下旬に都内であった展示会で並んだ。いずれも千葉県内で捕獲されたイノシシやシカの皮から作られたものだ。レザー製品によく使われる牛革と比べ、イノシシは生地がしっかりとしていてレザージャケットなどに向き、きめ細かくて柔らかいシカは袋物に合う。辻栄さんは「野生動物たちの命に新たな価値を与え、ポジティブな循環に導きたい」と語る。

県内では野生鳥獣による農作物の食い荒らしなどの被害が年間三億〜四億円に上る。対策のため年間二万〜三万頭超が捕獲されるが、食用のジビエとして活用されるのは一割ほど。そして、その場合でも、獣皮はほぼ使われることなく処分されてしまおうという。

チバレザーは、こうして廃棄されていた皮を再生。独自の製法を用い、使い終わった後の資源循環にもこだわらる。一般的には、皮をなめす過程でクロムと呼ばれる化学薬品を使うことが多い。しかし、クロムは焼却されると有害物質を出し、埋め立てられれば環境に負荷がかかる恐れがある。そのためチバレザーは、マメ科の植物が原料のなめし剤を使用。薬品を使う染色や漂白をしないため、土に返すことができるという。

辻栄さんは独学で皮革職人の技術を身に付け、東京都内で工房を開いた後、二〇一九年に千葉県・外房の睦沢町へ移住。獣



### 増える捕獲数 20年度135万頭

農作物被害をもたらすイノシシやニホンジカの捕獲頭数は年々増加する傾向にある。

2000年度は全国で28万頭だったが、えさ場となる耕作放棄地が増え、生息域が拡大。対策として国が強化エリアを設定する集中捕獲キャンペーンの効果もあって、20年度は過去最多の135万頭に。21年度も125万頭(速報値)に上った。

都道府県別(20年度)で見ると、捕獲頭数が最多だったのは北海道の12万6000頭で、大分県の8万頭、兵庫県の6万9000頭と続く。首都圏では千葉県が特に多く、3万8000頭。

農作物被害額は、対策が進んで減少傾向が続くものの、21年

### イノシシとニホンジカの 全国の捕獲頭数



度は全国で計100億円と依然として高額だ。

国は捕獲鳥獣のジビエとしての活用振興を推進。25年度までに利用量を現在からほぼ倍増の4000トにすることを目標に、処理加工施設整備やジビエ取り扱い飲食店を支援する補助金を各自治体に交付。北海道空知地区や長野市をはじめ、捕獲から処理、販売までがつながった先進的な全国16地域を「ジビエ利用モデル地区」とし、取り組みを各地に紹介している。

### 千葉の3職人

害を通して命の尊さや経済循環などを伝える子ども向けの出版前授業も続けてきた。

ラボの発起人に名を連ねるのは、館山市の獣害対策コンサルタント会社に勤め、県内に多いシカ科のキョンなどの「ジビエアート」を手がける大阪谷未久さん(三)。そして革製品を作りながら、木更津市を拠点に獣害や環境問題に関する校外学習や研修を担う佐藤剛さん(四)。志

強調する。

辻栄さんは「野生動物をジビエとして食べるだけでなく、その副産物としての皮を革として使い土に返すことで、命が巡る循環の最後のヒースが完成する。獣害は全国であり、こうした理念を各地にも伝えたい」と強調する。

本社の新聞編集は、すべて再生可能エネルギーの電力で賄われています。

# 朝日新聞

朝日新聞東京本社  
〒104-8011  
東京都中央区築地5-3-2  
電話 03-3545-0131 www.asahi.com

主に 酒造用フィルター  
総合水処理  
エンジニアリング

鷺田 清一 2737

重要なのは、身体に備わっているあらゆる感覚を遠い音に耳を澄ますようにして開いていくことです。

光嶋裕介

## 関連ニュース

2  
3  
4  
助  
材が鍵

# 害獣の命チバレザーに転生

農作物を荒らす「害獣」として駆除された命を無駄にしない。県内に拠点を置く革職人3人が、捕獲された鳥獣を資源として生かす活動を始めた。(相江智也)



「シシノメラボ」を立ち上げた(左から)辻栄さん、大阪谷さん、佐藤さん。16日、県庁

## 革職人3人、環境配慮しブランド化へ

食肉の加工販売や革製品のメーカーなどと協力し、これまで廃棄されてきた獣皮の活用や、環境に負荷をかけない革製品「チバレザー」のブランド化などを目指す。

3人は県内で革製品を手がける辻栄さん(43)、大阪谷未久さん(31)、佐藤剛さん(42)。団体名は「シシノメラボ」。野生鳥獣の視点から考えたいという思いが込められている。

県によると、県内の鳥獣による農作物の被害は2021年度に約3億円。一方、捕獲した鳥獣を食肉などに加工する取り組みは広がりがつつあるが、流通しているのはイノシシで10%程度。獣皮についてはほとんどが廃棄されているのが実情だという。

辻栄さんは陸沢町を拠点にシカやイノシシの皮を革製品として生まれ変わらせる一方、子どもたちに鳥獣被害を通して命の大切さを

## 21年度 農作物被害3億円 ■ 食肉流通は途上



「土にかえる」製法で作った革製品。「チバレザー」としてブランド化を目指すという

伝えてきた。「大きく発展させるには、横のつながりが必要」と感じ、同様の活動をしていた大阪谷さんと佐藤さんに声をかけたという。

大阪谷さんは鳥獣対策などを手がける館山市の会社にも所属。シカ一種で特定外来生物のキョンの皮の柔らかい質感にひかれ、環境に負荷を与えないぬめしや染色の工法で革製品を作っている。佐藤さんは革製品を製作しながら、木更津市にある農業や食の体験施設で、環境問題の校外学習や企業研修に携わっている。

辻栄さんは「肉を食べると皮が出る。ゴミとして焼却すれば環境に負荷がかかる。21日午前10時半から、駆除された鳥獣の肉を動物に与える「屠体給餌プロジェクト」を進める千葉市動物公園で、鳥獣被害や対策、資源の循環などを考える講演会を開く。問い合わせは共催の動物公園(043・252・1111)。

◇ @makuhari-play.jp

廃棄処分される有害鳥獣の皮を資源として有効活用しようと、県内の革職人3人が新たな団体を設立し活動している。3人は「害獣を『地域の財獣』

に変える」と意気込み、自然環境に配慮し最終的に土に戻る革製品の開発や企業などと連携した経済モデルの構築を目指している。



シシノメラボ発起人の(左から)辻栄さん、大阪谷さん、佐藤さん=千葉市中央区

# 廃棄の皮を有効活用



辻栄さんが作った「土に戻せる革製品」

今後は土に戻せる革を「チバレザー」として商標登録することも目指している。大阪谷さんは地域の課題である害獣を名産品へ転換する方法を確立することで、全国の害獣に悩む人の助けになれるよう努めたい」と話した。

新団体「シシノメラボ」を立ち上げたのは、辻栄(43)は、2021年度の野生鳥獣による農作物の被害額は全国で約155億円。大阪谷(31)は、県内でも3億円以上。佐藤(42)は、駆除された鳥獣の約10%は食用として流通しているが、皮が利用されることはほとんどないという。辻栄さんが発起人代表を務めている。

農林水産省の集計で、シシノメラボは有害鳥獣に「革」としての価値を見いだし、命を余すことなく地域経済に還元できる方法を模索していく。食べること革製品を作ることに先にある「土に戻す」を重視し、循環資源としての革製品の製作に取り組む。幅広い活動ができるよう法人化も視野に入れており、辻栄さんは「もったい命を最後まで有効活用していきたい」と話した。

# 害獣を地域の財産に

## 革職人3人「シシノメラボ」設立



郵便番号 260-0013  
千葉市中央区中央4丁目14番10  
千葉日報社  
電話 043(222)9211

5月23日(火)

芝工業 素晴らしい地球



空気調和・衛生設備・設計施工

テレビ 19 ラジオ 18

つり人出8倍 3



整備、白紙に 2

ほぼ実物大ニュース

奈良

新聞

(第3種郵便物認可)

# 害獣の皮 資源に変身



「チバレザー」の商標登録を目指す辻栄さん(左)と大阪谷さん(中央)、佐藤さん

## 「チバレザー」ブランド化へ

県内で捕獲されたイノシシやシカなどの有害獣の皮を資源として活用し、害獣から「財獣」に変えていく。県内で活動する革職人3人が、こうした構想の実現を目指す団体「シシノメラボ」を発足させた。ほとんどが廃棄されている獣皮をなめし、環境に優しい革「チバレザー」としてブランド化したという。

(尾藤泰平)

### 革職人が団体発足

県庁で5月16日、3人は記者会見を開き、団体の設立を発表した。手にしていたのは、ジャケットや財布、ブックカバーなど獣皮を使った革製品。代表の辻栄さん(44)は「『厄介者』として焼却処分されているものたちも、立派な製品に生まれ変わるんです」と力を込めた。

県によると、有害鳥獣による県内農作物への被害金額は、2021年度には約3億円に上った。約2万頭のイノシシが21年度に捕獲されたが、ジビエなどとして流通しているのは1割程度で、皮のほとんどが廃棄されているという。

睦沢町で、これらの皮を使って土にかえせる革製品を製作し、子供たちに命の大切さを伝えてきた辻栄さん。「横のつながりを広げた方が、活動を大きくしていける」と思い立ち、熊山市と木更津市でそれぞれ同様の活動をしている大阪谷未久さん(31)と佐藤剛さん(42)に声をかけた。

団体名のシシノメラボには、「野生鳥獣の視点を大切にしていこう」という意味を込めた。

牛や豚などは広く流通し、革の生産体制も整っている。しかし、野生のイノシシなどを革にするにはコストがかかると、皮の厚さなどに個体差があり、機械で処理できないことが多いためだ。

それでも、丈夫で水に強いイノシシや柔らかく手触りのいいキョンなど、害獣からできる革には他の動物にはない特長もある。傷があることもしばしばだが、大阪谷さんは「自然の中で生きていた時の

個性が革に表れるのも、野生動物ならではの大きな魅力」と強調する。

シシノメラボでは今後、土にかえすことができる革を「チバレザー」と名付け、商標登録を目指す。企業や団体にも、獣皮の活用を呼びかけていくという。辻栄さんは「害獣を捕まえて食肉にした時に初めて、副産物として革ができる。獣害問題を広く知ってもらい、チバレザーを新たな県の財産にしていけたら」と意気込んでいる。

働きかけの狙いだ。免許のない人に向けては、オンラインによる狩猟の疑似体験を実施する。

また、ふるさと納税での寄付を募り、対策事業にかかる費用に充てる。返礼品には、県の事業で捕獲したキョンを使用したジビエや革製品を用意する。

狩猟体験の申し込みは県のホームページから10月20日まで、ふるさと納税はポータルサイト「ふるさとチョイス」で今年いっぱい受け付ける。担当者は「狩猟に関心のある人に広く関わってもらい、一層の対策強化に努めたい」と話している。

### 県、駆除人材確保へ「協力隊」

県は有害鳥獣対策として、今年度から「県有害鳥獣捕獲協力隊」を発足させる。狩猟免許を所持しているのに活動していない「ペーパーハンター」や狩猟に関心のある免許未取得者を、「協力隊」として募り、害獣駆除に携わる人材の確保や駆除活動の費用調達につなげる。

昨年度時点で、県内の狩猟免許所持者は約5000人で、そのうち、駆除の主な担い手となる県猟友会の会員数は2200人程度にとどまる。

そこで県は、協力隊のペーパーハンター向けに、狩猟現場へ同行するコースを企画。実際の現場を体験することで関心を高めてもらい、将来の



# 毎日新聞

MAINICHI



10月1日(日)

2023年(令和5年)

Sunday

ひと  
ちば

ジビエ加工処理施設を運営する会社で、イノシシやキョンなど野生鳥獣の皮や骨を活用した皮革製品の製作に関わってきた。独立し、2024年に館山市内に自身の工房をオープンするため、準備を進めている。

## ジビエレザー工房オープンへ 大阪谷未久さん(31)



おおさかだに・みく 1992年、大阪府出身。早大文学部卒。就学後、過ごした佐倉市から2021年に南房総市に移住。同年、ジビエ加工処理施設を運営する「アルコ」(館山市)に入社した。工房はJR館山駅前の複合施設内に構える予定だ。

が有書鳥獣に悩まされていた。耕作放棄地が増える「コ」に就職。食肉加工に中、書獣による食害も拡大。猟師が書獣を駆除している現状を知り「動物の皮や骨に目を付け、ジビエレザー製品の企画、製作を始めた。」と心を痛めた。大学卒業後、都内の農業系出版社を経て、21年に館山市でジビエ加工処理施設を運営する「アルコ」も減らすことができるのは

# 動物の命無駄にしない

根底にあるのは「人間の都合で奪った命を無駄にしたくない」との思い。ジビエレザーを地域課題の解決につなげるのが夢だ。

【長沼辰哉】

中央学院は2点を追う6回、森田、上村の連続安打などで同点に追いつくと、蔵並が捕逸で還り勝ち越し。九回も更に3点を追加し勝負を決めた。習志野は初回に4点を先取したが、その後好機を作れなかった。

## 拓大紅陵 VS

式野球大会(県高野連軟式部・県教委主催、毎日新聞社など後援)の準決勝が30日、成田市九重高等学校と拓大紅陵(八)の対戦が行われた。

【近森歌音】

▽準決勝	0000010000
八千代松陵	000120010000
000120010000	X31
拓大紅陵	(八) 佐藤 都丸 (拓) 鈴木 関谷
日出国	不戦勝 千葉響
総合・筑波大付聴特の	

(毎日新聞社など後援)の入賞者が決まった。1部の書写・書道と2部の芸術に、計1211点の応募があった。上位入賞者は次の皆さん。(敬称略、数字は学年)

休日当番医

1日	155・3456(市川市) 7・1222(歯) 37
2日	7・8888(浦安市) 355・9119(松戸市) 366・0010
3日	7187・7020(茂原・長生) 244(夜間) 8080(八千代市)
4日	482・6870(内) 482・6871(外) 482・6871
5日	432(内) 611(外)